



## 異業種のチームがプロジェクトを動かす

異なる業種・職種のメンバーが動かす CONTRAIL プロジェクト。各機関で実務を担当する人たちは綿密に連絡を取りながらプロジェクトを運営しています。また、毎年、関係省庁、企業、研究機関の関係者らを集めてプロジェクトの推進委員会を開催しています。



前身の観測プロジェクト時代から推進力となってきた日航財団は、CONTRAIL プロジェクト開始後も推進委員会や実務者会議の開催業務を担当するなど、事務局の役目を務めています。

日航財団で2010年からCONTRAILの担当を務めている原田亮さんは、事務局の役割について模索しながらプロジェクトと向かい合っているとのこと、次のように語っていただきました。

日航財団で2010年からCONTRAILの担当を務めている原田亮さんは、事務局の役割について模索しながらプロジェクトと向かい合っているとのこと、次のように語っていただきました。

常務理事の中川もわたくしも、前任から全く引継ぐ余裕がなかったことから、暗中模索で一年間を回すという感じでした。

CONTRAIL プロジェクトの事務局として、現在、技術的な側面では詳細な知識のない状況で参加していることもあり、当財団のこのプロジェクトにおける存在意義(そもそも財団はここに必要か?)という点から出発したというのが正直なところではあります。

しかし、プロジェクト・メンバーのみなさんにご協力、激励をいただき、ゼロからの議論もさせていただき、財団という中立な立場から、産官学を組織化するという、我々財団の存在意義を再確認できました。

有名な温室効果について研究されておられる第一級の研究者、関連会社の幹部、官庁が集まるプロジェクトの推進委員会は個人的には圧巻でした。一堂に会するこの場の更なる活性化策はないか、考えていきたいと思っています。

自分が担当して初めての委員会について、よい評価をいただいたことは事務局として率直に嬉しいことでした。

今後は、公益財団法人として、研究成果をわかり易く市民に発表していき、それによって世間の注目を高め、一層の支援を受け、プロジェクトの発展に貢献していきたいと考えています。

日航財団 原田 亮

プロジェクトリーダーである国立環境研究所の町田敏暢さんによると、装置開発を始めた頃の実務者会議では、まるで



ケンカのように激しい議論が交わされることもあったとか。研究者は精度の高い観測のために標準ガスの搭載が絶対条件と言う一方で、航空会社は「そんな高圧のボンベを載せるなんて安全上ありえない」と譲りませんでした。議論と実証を重ねて安全面の不安は払拭され、高精度の観測が実現しました。

その後も、異なる見解が激しくぶつかることが時にあります。しかし、大きな目標を共有するそれぞれの当事者が常に次善の策を探りながら、チームとしてプロジェクトを動かしているのです。